

## 令和2年度の中学校技術・家庭科の研究推進について（案）

茨城県教育研究会家庭、技術・家庭研究部  
中学校研究企画部

### 1 令和2年度の研究推進概要

令和元年度には、「未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む技術・家庭科教育」をテーマに掲げ、全県をあげて関ブロ茨城大会を開催することができた。全体会と全県にて9分科会を開催し、新学習指導要領完全実施を前に、他都県の参加者からも好評を得られた。そこで、令和2年度については、関ブロ茨城大会の成果を最大限に生かし、さらなる深化を目指して継続したい。

令和2年度

研究主題 『未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む技術・家庭科教育』

今まさに3観点による評価（知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）を実施しようとしている。特に「思考・判断・表現」の評価については、令和元年度の関ブロ茨城大会での取組を十分に生かすことができる。

茨城大会で、全県全ての内容で取り組んだラーニング・ジャーナル、技術分野の図を用いた表現、家庭分野の気付きノートやパフォーマンス課題などは、生徒の「思考・判断・表現」等を見取るために欠かすことのできない手段と考える。これらの取組が十分に実践されていない学校に対しても、関ブロ茨城大会の成果を伝え広げていきたい。

教師から一方的に知識や技能を伝えることが中心の授業では、生徒は自分の課題をもち自分なりに考え、判断し、表現することができない。また、生徒の自由な取組だけでは多くの生徒は課題を解決する学習活動をするのが困難である。教師がまず指導計画を工夫し、どのように授業を行うかを構想する必要がある。その上ではじめて、生徒が多面的に考え判断し、表現したくなる活動を実現することができる。ラーニング・ジャーナルなどを用いることで、生徒達の思考の過程を見取り、どのような理由でそう判断したのかを語らせたい。作品の完成だけでなく、問題解決的な学習の課題解決の過程で学んだことを生徒自身の言葉で表現させる授業展開を、全県に確実に広げていきたい。

### 2 令和2年度の研究の柱

#### (1) 「思考・判断・表現」をいかに見取るか

関ブロ茨城大会で取り組んだ様々な指導法を、3観点の一つとしてどのように見取ることができるのか具体的に考え、評価規準だけでなく、具体的な判定基準を考える視点をもって研究に取り組みたい。例えば以下のような内容が考えられる。

- ・思考力のある生徒とは、判断力のある生徒とは、表現力のある生徒とはどのような状態の生徒だろうか。どのような手段で見取ることができるだろうか。
- ・ラーニング・ジャーナルを何をどう見取る資料として活用すべきだろうか。
- ・パフォーマンス課題など課題解決の過程での学びをいかに見取るべきだろうか。

※例えば、ABCDの各内容について、「思考・判断・表現」をいかに見取るかを詳細に考えておく必要がある。それらをどのように積み上げることで、技術・家庭科として、どのような生徒の姿を目指していくのかを検証する必要があるのではないかと。

また、「思考・判断・表現」を見取る上でのラーニング・ジャーナルの使い方について

ても、各地区でさらに実践的な研修を深めていくことも必要である。

## (2) 評価を授業改善につなげる（指導と評価の一体化）

授業を通して学んだことが、生徒にどのように身に付き理解されているのかを、できたできなかったという目に見える単純なレベルではなく、生徒の気付きや学びとして具体的に表現させる必要がある。教師が想定を柔軟に広げ、生徒自身がどのように考え、判断し、表現したのかを、次のクラスや次年度の指導、他教科等の学びに生かすことで、授業改善へとつなげる学習指導をぜひ実現したい。

例えば、中学校3年生の最後の学習の成果は、1年生や2年生の学びの積み重ねによって変わってくるものである。その生徒の学びを、翌年や翌々年の授業に生かす視点をもつ必要がある。

## 3 研究企画部組織

技術チーフ	つくば市立大穂中学校	川俣 純
家庭チーフ	鹿嶋市立大野中学校	冨塚 貴子
技術中央	笠間市立友部第二中学校	秋山 昌允
技術県北	日立市立助川中学校	田丸 甫
技術県南	つくばみらい市立谷和原中学校	田中 浩之
技術県西	古河市立三和東中学校	鈴木 宣明
技術県東	神栖市立神栖第一中学校	山田 和樹
家庭中央	水戸市立石川中学校	田山 真納美
家庭県北	常陸太田市立太田中中学校	小澤 亜沙美
家庭県南	守谷市立守谷中学校	山崎 美也子
家庭県西	古河市立古河第三中学校	塚原 尚子
家庭県東	鹿嶋市立大野中学校	冨塚 貴子

※関ブロ茨城大会が終了したため、令和2年度の各地区代表は1名となる。

## 4 その他の懸案事項

### ① 県版ノート編集方針（8ページ）

※原稿提出は夏休みまで、編集方針を決め東京書籍、ひばり出版に打診

県版ノートのページの割り振り（令和2年度版→令和3年度版）

1 ページ 茨城は「産業大県」 → 技術分野ラーニング・ジャーナルで

2～3 ページ 作品展について → 同様（作品レポート等、写真を差し替える）

4～5 ページ 技術分野のフェアの内容 → 同様（写真等を差し替える）

6～7 ページ 家庭分野のフェアの内容 → 同様（写真等を差し替える）

8 ページ ラーニング・ジャーナル → 家庭分野（関ブロの成果を生かす形で）

※今年度のフェアの担当者から早めにデータを入手

### ② 企画部の研修はできる限りオンラインミーティングで実施、オンライン出張を実現する。